
セブンスター

山口春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セブンスター

【Nコード】

N1889K

【作者名】

山口春

【あらすじ】

不真面目な生活の青年が実家に戻ると、近所のばあさんが亡くなった。

青年は特に思い入れのないその葬式にしぶしぶ参列するが、ふと、自分とばあさんをつなぐ一つの線を思い出す。
なんでもない日常の、ちよっとした話。

少しだけ甘い煙が、僕を包む。

ほんの三日前、近所のばあさんが静かに死んだ。葬式は、僕の2回目の留年が確定し、春までの1ヶ月意味もなく大学の近くにおいてもろくなことがないと判断したうちの両親によって実家に連れ戻された翌日に行われた。近所の人間だっただけで香典の一つも持つていかなきゃいけない立場の我が家は、僕を家族代表として、ただ暇な人間だからなんだけど、やたらと白い建物に、休みだつてのに七五三みたいなスーツを着せ、送り出すことにした。そして、なんの思い入れもない葬式に、僕は不似合いなへらへらとした表情をかかえて、図書館に行くみたいになんか適当な気分であつた。

親父から借りた車の中の灰皿は随分捨てていなかったからか、気がつけばマットの上にまでその領域を拡大しようとしていた。まあいい、どうせ自分の車じゃないんだ、と僕はポケットからタバコを出し、灰の捨て場所を考えもせず火をつけた。車の中はあつという間に煙に包まれる。健康増進法？分かつて吸ってるんだから自分のスペースでくらい好きにさせてくれ。

式場までは、ほんの5分で着く。なんたつて田舎なんだから、コンビニとカラオケボックス以外は全て近所にあるのだ。

会場では、見慣れた顔ばかりが、ひどく忙しそうに働いていた。そりゃそうだ、親族だつて当然全員近所に住んでいる。近所の親族には一様に仕事を与えられる。それが葬式なんだつてことくらい、葬式をしたことがない僕にだつて分かる。

「よう、相変わらずふらふらしてるらしいな」

と、ばあさんの4人目の息子に当たる、健二さんが話しかけてきた。トラックに乗ってる男のような見た目とは裏腹に、小さな電気屋で、空気清浄機を良心的な値段で販売している。見かけによらないとも思うけれど、年を取り始めた男なんて、みなそんなものなのかもしれない。

「おかげさまで。僕はむしろ、こういうのにちゃんと出席してる健二さんにびっくりですよ」

おどけていうと、急に真面目な顔で健二さんが僕の肩を叩いた。

「ばあさんだからな。俺だって、いろいろ言いたいことはある。文句も含めて、言えるのは今日が最後のチャンスだからな」

そう言って、僕の目を見る。無理やり奥さんが健二さんの襟を引っ張らなかつたら、僕はもしかしたらあの目からめ取られていたかもしれないなかった。

形だけの香典を渡し、焼香をすませてさっさと帰ろうとしていた僕の手を、ばあさんのふたり目の娘の、その娘がつかんだ。

「久しぶり。相変わらず」

「ふらふらしてて、すみませんね」

先に言っただけで、と得意げにしていると、みずきはうんざりしたように、

「来たんなら、ちゃんとしてよね」

とだけ言っただけで、会場に戻っていった。一体僕は、ご近所にどれだけ信用されていないというんだ。

会場に入る前に、散々ばあさん一族の苦言を頂いてうんざりしていたものの、とりあえず出席したという事実と、自己の信用回復のために、僕は式の一通りに参加することにした。どうせ暇なんだから、いい勉強だ、と思い込むことにして。

結婚式もそうだけど、格式ばった 式っていうのは、なぜこん

なにつまらないんだろう。お祝いも、感謝も、悲しみも、別にこんな風にしなくたって相手に伝える方法はいくらでも有ると思うのだけれど。僕は、2、3回あくびをかみ殺し、4、5回盛大にあくびをして、読経を子守唄に喪主の挨拶を待った。式自体は、しめやかに行われた、のだと思う。申し訳ないけれど、本当に興味がなかったのだ。線香の匂いだけが、僕の鼻を必要以上にくすぐった。

ばあさんの一人目の息子、英明さんは憔悴とは程遠い、どちらかといえば晴れやかな表情でマイクの前に立った。そしてトントンとマイクチェックをして話し始めた。

「みなさま、本日はお忙しい中亡き母の通夜にお集まりくださいまして、まことにありがとうございます。皆様から温かいお心遣いを頂戴し、母も喜んでいると思います」

僕は、帰ってから何をするかを考えていた。どうせ暇だと思って、読んでいない本、クリアしていないゲームを大量に持ち帰ってきていたのだ。どれから消化すればいいだろう。

「なお、故人の強い希望により、家族だけで母を見送るつもりでございますので、まことに恐れ入りますが皆様に葬儀のご案内を差し上げることができません。どうぞご理解の上ご容赦いただきますようお願い申し上げます。」

僕はRPGのレベル上げの時間の効率化について考えていた。そりゃはぐれメタルがいれば楽なんだけど、だからってはいえ男と同じエンジニアウン卜率でできたらそれはありがたみもなにもないよなあ。

「また、この場で言うことではないのですが、是非言っておきたいことがありますので、言わせていただきます。皆様ご存知のとおり、この式場から歩いて10分ほど行ったところに、母が34年続けてきたタバコ屋があります。時代の流れもあり、売り上げという意味では趣味のような店でしたが、母はあの場所をとっても大切にしていました。とはいえ、私どもはすでにそれぞれ独立しており、タバコ

屋を継げる人間がおりませんので、今月末を持ってタバコ屋を閉じたいと思っております。みなさま、本当にありがとうございます。近所の名物ばあさんとして、母も日々いきいきしております」

「マジで？」

と、僕は思わず声に出してしまった。タバコ屋が、なくなる？

「申し訳ございませんが、そのように言っていたただけで、家族一同感謝しております」

「いや、感謝とかどうでもいいからさ、続けてよ。あそこないと不便だし、寂しいし、ほら、名物じゃないすか」

どうせ声を出したんだ、言いたいこと全部言っちゃえ。僕は開き直って、立ち上がった。

「できればそうしたいのですが、なにぶんできない事情もありますので」

「いやいや、そんなことないっしょ。できますって」

僕が笑っていると、英明さんが正面から僕を見据えた。そして、いつもの口調で、

「おい、ケツの蒼いガキが吠えるな。ばあさんにかわいがってもらってても、それとこれとは話が別なんだよ。じゃあお前が全部やれよ。貸してやるよ。家賃さえ納めたらお前に店やらせてやるよ。できんのかよ。自分の財布も管理できないクソガキが、親にべったりのお前がさ、できるってのか？ばあさんと同じことが。考えて物言えよ」

と僕だけに向けて告げた。口調は静かだったが、ひどく重い、そして悲しい声だった。

「できないっすよ。すみません。でもね、タバコ屋って、すごく大事なんです。おっさんにもガキにも、中坊にも。それだけは分かって欲しかったんで」

僕は、言いたいことを全て言えた、と満足して座った。英明さんの言っていることが正しいことも分かっているし、腹も立たなかった。むしろ普段どおりの英明さんということが分かって安心したくらい

だ。

「分かった。」

それだけを言うと、英明さんは元の、葬式用の口調で謝罪をし、式をまとめた。

僕達が話している間式場は少しだけざわついたものの、知り合いばかりが参列していたおかげなのか、騒ぎはすぐに収まって、そりやうちの両親に僕の話は行くだろうけど、特に問題はなかったと思う。後ろで何人かのため息は聞こえたけれど、それはきっと二人に對して平等にあきれただけなのだろう。

僕は出棺に付き合う気はなかった。僕のご近所としての責務は、これで十分だと思ったからだ。ネクタイを緩め、式場を出て、古びたバンに向かう。すると、奥から英明さんが走ってきた。

「さつきはすみませんでした」

僕は素直に謝る。そりやあ僕だって、素直に謝るときもある。

「かまわんよ。俺も悪かった。また、うちに飲みに来い。日本酒しかないけどな」

そういつて英明さんは笑った。

「店たたむつて言つてましたけど、たてもんはどうするんですか？」

「あ？取り壊すよ。土地、買うか？なんか店でもやるか？」

やめときますよ、また飲みに行きます、と言つて僕は車に踵を返した。英明さんはそれ以上何も言わなかった。じゃあな、と後ろで声がかして、会場に戻る足音を僕は後頭部で聞いていた。

帰りの車の中で、僕は初めてタバコを買った日のことを思い出していた。

中学生の時、友達がかっこつけてタバコを吸っていたのを見て、僕は逆にたばこはダサイと思つていた。タバコを吸うと、あんなふうになる、とそう感じていた。まあ今では吸つてしまつているわけ

だから、僕も随分とダサイ人間になってしまったってことなんだろう。高校に入り、僕は初めて人を好きになって、そして振られた。気持ちのいい振られ方だった。告白の2秒後には謝られていた。しかも、約束に遅れたときのような、潔い謝り方だった。僕は、お、おう、と頼りない返事をしてその答えを受け取った。そして、3日後に意味を正確に理解し、少しだけ泣いた。

その夜、ふらふらと近所を散歩しようと玄関を出ると、2件となりのタバコ屋の電気がついていて。普段の閉店は6時、今はもう10時になる。いくらなんでもおかしいと、僕はタバコ屋に向かった。「ガキが夜中に出歩くな、連れ去られるぞ」

ばあさんは僕を見ると、黄色い歯を見せてがははと笑った。右手には両切りのピース。銜えていないときを、僕は見たことがない。

「ばあさんこそ、こんな時間に何やってんだよ。閉店だろ？」

ばあさんは、深海魚みたいに口を大きく開けて、

「気分だよ。関係ないだろ」

と近所みんなに伝えるような大声で僕に言った。

「そっぴいやお前な、振られたらしいな。情けないなあ」

続けて拡声器のように僕の弱点をつつくものだから、僕はあわててばあさんを制した。

「誰に聞いたんだよ！」

「みんな知ってるよ。で、切なくなつて散歩かい。青いねえ。見てるこつちが恥ずかしくなるよ」

ああ、恥ずかしい、とばあさんは吸つてたタバコを消し、新しいタバコに火をつけた。

「関係ないだろ。まあ、今回は縁がなかったんだよ。次だよ、次」
そう言うと、ばあさんは豪快に笑って、

「たばこには、逃げんなよ」

と、僕に言った。真っ直ぐな目だった。仕方がないから、僕はなぜ

?と聞くことにした。

「そうやって吸ったタバコはな、まずいんだ。タバコがかわいそう
だろ。どうせなら彼女ができたときに、思いっきり吸いな。それが
タバコってもんだよ。分かったら帰りな。あんたに売るもんはこの
店にはないよ」

言うことを全て言ったのか、ばあさんは僕から視線を外し、奥にあ
るテレビに目を向ける。僕は悔しくなつて、

「じゃあ、恋愛成就祈願するからさ、タバコくれよ。賞味期限が切
れるまでに彼女作つて、ばあさんの前で吸うよ」

とテーブルに300円を投げつけた。ばあさんは視線を僕に戻し、
セブンスターお釣りを放り投げ、優しい口調で言った。

「男なんてねえ、数ヶ月やそこらで突然いい男になつたりしないも
んさ。どうせならその賞味期限が切れるまで必死で自分を磨きな。

前より少しでもいい男になつたと思つたら、そのタバコをさ、賞味
期限が切れてようが何回でも交換してやるよ。それぐらいやってみ
てこそ、男つてもんだらうが。分かつたかい？」

僕は、自分でも驚くくらい素直に分かつたと返事をした。そしてセ
ブンスターをつかむと、家に戻つた。吸わないタバコ。吸えないタ
バコ。僕はなんだか強い武器を手に入れたような気分になつた。そ
して、タバコ側面の賞味期限を見る。期限は半年先。半年間努力し
るつて?僕がばあさんの顔を思い出し、そして今頃笑っているであ
ろう顔を想像して、少し笑つた。そして、思わず呟いた。

「半年頑張るつて、だる」

家に帰ると、どこからか話を聞きつけた両親に小一時間説教され
た。僕は、その話のほとんどを脳みそに入れることなく、その音の
羅列を受け流した。肝心なのは、ベストなタイミングで謝り、最後
に分かりましたということだけだ。そんな僕の思惑を見透かしたの
か、両親は僕の頭を思いのほかきつくたたくと、

「ばあさんの顔に泥を塗るようなことするな」

と語気を荒げた。そんなつもりはなかったのに、と言った僕に、父親は分かっている、が時と場所を選べ、とそれで説教をまとめた。僕はスーツを脱いで、自分の部屋に戻った。

唐突に携帯がなる。娘の娘からだ。

「バカだね。」

とだけ書かれたメールを削除し、僕は勉強机に座った。バカかな。あの店、すげー好きなんだけどな。分かんないかな。僕はボーッと天井を見つめる。そして、おもむろに引き出しを開け、賞味期限が切れたセブンスターを出した。これ、吸えるかな、吸ってもいいかな。なあばあさん、俺ってあれから少しはいい男になれたかな？ ビールをむしり、紙を破って。口にくわえ、ライターで火をつける。当たり前だけど、賞味期限が切れたタバコはまずい。それに煙も多いのかもしれない。きつと、そうだ。ほのかに甘いその煙のせいで、僕は少し泣いた。

ねえばあさん、やっぱり僕がセブンスターを吸うのはまだ少し早かったのかもね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1889k/>

セブンスター

2011年2月1日04時33分発行